

作業の理解：作業療法に不可欠なこと

ヘレン・J・ポラタイコ¹⁾，吉川ひろみ²⁾

1) トロント大学，2) 県立広島大学

Understanding occupation: An occupational therapy imperative

Helene. J. POLATAJKO¹⁾，Hiromi YOSHIKAWA²⁾

1) University of Toronto, 2) Prefectural University of Hiroshima

これは、2013年11月30日に第17回作業科学セミナー基調講演としてポラタイコが講演した内容を基に、スライドの翻訳と講演時の通訳を務めた吉川が執筆したものである。吉川が、ポラタイコの講演内容を要約し、若干の説明を追加した。

この講演の目的は、作業が普遍的性質をもつかどうかを探ることである。そのために、作業療法の視点から、不可欠なものとしての作業をどう理解するかを明らかにし、作業の普遍性を探するための議論を展開し、作業には普遍的特異性があると提案する。続いて、この普遍性について批判的に考え、作業科学者のための人の作業の理解を進展させる方法を提案したい。私の見方は、私が女性であり、作業療法士であり、研究者であり、カナダ人であるという視点からのものだ。あなたの見方は、あなたが誰であるかに由来する。

作業を理解するためには、「理解」、「作業」、「作業療法に不可欠なこと」という3点の概念理解が必要である。カナダでは、「作業療法とは、作業を通して日常生活を行うことを可能にする技術と学問である。健康を促進する作業を人々が行うことを可能にし、公正で全てを包み込むような社会を実現すれば、すべての人が人生の日常の作業において、自らの潜在力を使って参加することができる」と定義されている(表1)。カナダでは作業療法の中心は「作業」であり、作業療法の能力は「可能化」である。カナダでは作業療法の目標は、作業を通して、作業の遂行や結び付きの可能化を図り、作業参加をサポートする公正でインクルーシブな社会の可能化を図ることである。これが、個人、家族、集団、組織、全住民といったレベルに対して行われる。この目標を達成するために不可欠

なことは、作業の理解と、作業の遂行や結び付きの理解と、作業的公正とインクルージョンの理解である。

ここで、作業療法と作業科学の違いを明らかにしたい(表2)。作業療法とは専門職であり、多分野の知識を使う。作業をどう理解するかによって、どんな作業療法をするかが決まる。一方作業科学は、エリザベス・ヤークサが創設したときには、基礎科学であり、人の作業の体系的な研究であった。作業科学の研究対象は、人の作業の形態、機能、意味であり、及びこれらの健康との関連であった。この基礎科学は、体系的に整理された事実や真実を備えた知識や研究であり、観察や実験を通して得られた一般化できる法則の扱いを明示する知識や研究であった。一般化できる真実を得ることや、一般化できる法則を扱うということは、科学的声明(事実、理論、法則、原則など)を出し、これを実験や観察といった実証的方法を通して検証することである。世界の経験から得られた知識といった見方は、実験や観察の対象やそこから得られた科学的声明であり、科学的声明が十分に広く再現されたならエビデンスとなり、普遍性をもつことになる。普遍性の探求と

表1 カナダの作業療法の定義

Occupational therapy is the art and science
作業療法とは アート(技)と科学である
of enabling engagement in everyday living, through occupation;
日々の生活に結び付くことができるようにする 作業を通して
of enabling people to perform the occupations that
人々が作業を遂行できるようにする
foster health and well-being; and
(その作業は)健康や安寧を育て そして
of enabling a just and inclusive society so that all people may
公正でインクルーシブな社会を実現させ そうなれば、すべての人が
participate to their potential in the daily occupations of life
生活の日々の作業において自分の潜在力を発揮し参加することができる
(Townsend & Polatajko, 2007; 2013)

は存在の性質を探求することである（プラトンとアリストテレス）。

作業科学が明確にする必要があるのは、人の作業の普遍性である。Yerxa (2009) は、21 世紀の科学は、意識を伴う「私」を科学から引き離してしまったと述べた。つまり、日常生活を経験する人である「私」を、証明したり、検証したり、修復したりする対象となる「もの」(身体) から引き離してしまったという。このような見方は作業科学と作業療法の発展にも影響を与えると述べ、作業科学は行動する「もの」(身体) でありながら意志をもつ「私」、文化としての「私たち」、社会システムとなる「彼ら」(他者) を、ひとつのまとまりとして研究する統合された人間科学になる必要があると述べた。統合された科学である作業科学では、人の作業を普遍性をもつもの (It) であり、特異性をもつ私、私たち、彼ら (I, We, They) として認識する必要がある。

表2 作業療法と作業科学

作業療法	作業科学
<ul style="list-style-type: none"> • 専門職 • 多くの分野の知識を使う • 作業をどう理解するかによる変わる 	<ul style="list-style-type: none"> • 人の作業を体系的に研究するための基礎科学 • 人の作業の形態、機能、意味、およびそれと健康との関連を強調する • 質的パラダイムを多く使う
作業療法に不可欠なこと	作業科学に不可欠なこと
多層レベルで、次のことを理解する <ul style="list-style-type: none"> • 作業の力 • 作業遂行と作業との結び付き • 作業的公正とインクルージョン 	作業の普遍的特異性の探求 <ul style="list-style-type: none"> • 作業の力 • 作業遂行、作業との結び付き、作業的公正とインクルージョン

る。作業科学は普遍的特異性をもつ。その特異性は普遍的であり、それはさまざまな方法で明らかにすることができる。普遍性とは一般に広くみられるということである。これを帰納的、演繹的、反証的方法で調べていきたい。

帰納的というのは、観察を続けることから一般化できる真実が出現する確率を明らかにしていく方法で、観察から論理的に定理を出していく。観察した事例すべてに起こっていたなら、それはすべてに起こる。

表3 Occupation (作業) の定義

Merriam Webster Dictionary Occupation... an activity in which one engages the possession, use, or settlement of land (occupancy) the holding of an office or position the act or process of taking possession of a place or area (seizure) the holding and control of an area by a foreign military force the military force occupying a country or the policies carried out by it	辞書によると 作業は、 人が結び付く(行う)活動 土地の所有、使用、植民(領有) 地位の保持 場所や領域の所有の行為、プロセス 他国軍隊による領地保有 軍による国や法の占領
In the OS or OT context specific chunks of activity within the ongoing stream of human behavior which are named in the lexicon of the culture...(Yerxa et al., 1990)	作業科学と作業療法の文脈では 文化の語彙において名付けられる人間の行動の流れの中で行われる特定の活動の塊である。
doing culturally meaningful work, play or daily living tasks in the stream of time and in the contexts of one's physical and social world (Kielhofner, 1995)	文化的に意味がある仕事、遊び、日常生活課題を、時間の流れの中で、その人の物理的社会的文脈の中で行うことである。
In the Canadian OT context everything people do to occupy themselves, including looking after themselves (self-care), enjoying life (leisure), and contributing to the social and economic fabric of their communities (productivity). a set of meaningful activities, performed with some consistency or regularity, typically named for the predominant or primary activity. a group of activities and tasks of everyday life, named, organized, and given value and meaning by individuals and a culture (Townsend & Polatajko, 2007; 2013)	カナダの作業療法の文脈では、 人が自分自身を占有するすべてのことであり、身の回りの世話(セルフケア)、生活を楽しむこと(レジャー)、社会貢献や地域の経済的貢献(生産)を含む。 意味ある作業の組合せであり、一貫性や規則性がある。一般的には基本となっている活動の名前で呼ばれる。 日常生活の活動と課題の集合であり、名付けられていて、組織化されていて、個人と文化により価値と意味が与えられている。

たとえば、私が見たスワンがすべて白かったら、スワンはすべて白という具合である。演繹的というのは、一般化できる法則から真実を形成するもので、定理から論理的に結論を導く。観察した事例すべてに起こっていたなら、どの事例にも起こると考える。たとえば黒いスワンを見たときに、スワンは白という定理に反しているから、これはスワンではない、ということになる。カール・ポパー (Karl Popper) は、反証可能性に基づく実証主義を提案した。反証可能性とは、たった一つでも理論通りでないことが観察されたら、理論を疑えということ

である。ここでもう一度、作業科学と作業療法の違いを明らかにしたい(表2)。作業科学は基礎科学であり、人の作業の体系的研究である。作業科学はそれ自体のためにあり、主に質的研究が多く使われる。一方作業療法は専門職であり、多分野の知識を使い、作業をどう理解するかによって変わってくる。作業療法に不可欠なことは、多くのレベルにおいて作業の力を理解し、作業の遂行と結び付きを理解し、作業的公正とインクルージョンを理解することである。作業科学に不可欠なことは、作業の力、作業の遂行と結び付き、作業的公正とインクルージョンに関連する作業の普遍的特異性を探求することである。

作業の普遍性を、作業療法の視点から、実証主義と反証可能性を使って探求していきたい。まず用語から始めたい(表3)。世界各国の作業療法士は、自分の言語での「作業」という名前がよくないと思っている。英語の作業 (occupation) の定義を辞書 (Merriam Webster dictionary) でみると、「作業は・・・人が結び付く活動」とある。さらに「土地の所有や使用、地位の保持、場所を所有する行為やプロセス、他国の軍隊による領地の保有、軍による占領」と書かれており、このどれもが作業科学と作業療法には適用されない。作業科学と作業療法の文献では、作業は「特定の活動の塊であり、人の行動の流れの中にみられ、文化の語彙において名づけられる」(Yerxa 他, 1990)、「文化的に意味がある仕事、遊び、日常生活課題であり、時間の流れの中で行われ、その人の物理的社会的文脈の中で行われる」(Kielhofner, 1995)。カナダの作業療法においては、作業は「人が自分自身を占有するすべてのことであり、身の回りの世話 (セルフケア)、生活を楽し



図1 作業遂行の分類コード
Taxonomic Code of Occupational Performance (Polatajko et al., 2007; 2013)

むこと (レジャー)、社会貢献や経済的貢献をすること (生産性) を含む。意味ある作業の集まりであり、一貫性や規則性があり、基本となる活動の名前で呼ばれる。日常生活の活動と課題の集合であり、名付けられていて、組織化されていて、個人と文化により価値と意味が与えられる」(Townsend & Polatajko, 2007, 2013)。反証可能性の精神で作業の定義を考えると、作業は職業と同義ではない。また、まばたきする、呼吸する、座る、立つ、単に歩くことも作業ではない。作業には階層があり、作業遂行の分類コード (Polatajko, 2007, 2013) では、複雑さの程度により作業、活動、課題、行為、随意運動や精神プロセスの順に単純になっている (図1)。

特異性とはそれ特有の性質である。普遍性とは一般化できることである。作業の基本的前提には、人には作業ニーズがある、作業には治療的力があるという2点が以前から述べられている。さらに、作業は健康に影響を与える、作業は時間を構成し生活を構造化する、作業は人生に意味をもたらす (意味は文化と個人により決まる)、作業は特異的であるという点も作業の基本的前提である (Polatajko 他, 2007, 2013)。ここでは、次の7つの作業の普遍性について検証していきたい

(表4)。1) 人は作業的存在である、2) 人の作業は特異的である、3) 人の作業の形態は環境と人との相互作用から生じる、4) 人の作業の機能は人のニーズから生じる、5) 人の作業は意味の源である、6) 人の作業には力がある、7) 人の作業の力は何から影響を受けるのか、について検証していきたい。上記の6番目まではよく検証されているが、7番目については今後一層の検証が必要である。

作業の普遍的性質 1 : 人は作業的存在である

作業を行うのは人の本性である。人は、いつでもどこでも、個人的にでも、ペアでも、集団としても、文化としても作業を行う。積み木で遊ぶ乳児、棚に入り込む幼児、ボールで遊ぶ祖父と孫、マラソンを完走する高齢者がいる。定型発達児であろうが脳性麻痺児であろうが三輪車に乗る。女性でも男性でも多様なスポーツをする。民族特有の遊びをする。胸の前で抱いたり、背負ったり、籠に入れたり抱き方は多様だが、親は乳児を抱きかかえて出かける。天気の良い日に外で食事することもあれば、夜にレストランでキャンドルの明かりの下で食事することもある。季節に応じた作業もあれば、一生涯の人生の時期に応じた作業もある。歴史を通して人は作業をしてきた。家でも、学校でも、職場でも、遊び場でも作業をしている。家の中でもゲームをするし、外でもゲームをする。一人で踊ることもあれば、社交ダンスのようにペアで踊ることもあるし、よさこいのようにグループで踊ることもある。日本舞踊のように文化的作業もある。地球の洞窟を探検したり、月面を探索したり、スキューバダイビングや、水上スキーをするなど、さまざまな場所で作業をする。

ではこれが、反証可能かどうか考えてみる。非常に貧乏で、路地の隅で膝を抱えてじっとしている人がいる。刑務所などに収監されている人や、高齢者施設に長期間収容され放置されたままの人もある、うつや認知症により座ったまま何もしない人もいる。このように作業をしない人もいるが、それは作業を行うことを妨げられているか、どこか悪いところがある場合である。つまり、作業をすることを妨げられなければ、あるいはどこか悪いところがなければ、人は作業するので、普遍的に人は作業的存在だといえる。

作業の普遍的性質 2 : 人の作業は特異的である

人には、人それぞれの作業のやり方がある。さまざまな料理の仕方がある。子どもは道具を使うより手を使って材料をとる。食堂の調理場では、大きなコンロや多様な道具を使って料理をする。積雪量の多い地域で暮らす遊牧民は雪を掘って火をおこして料理をする。土を掘るといいう作業も多様である。子どもたちは砂浜で砂を掘って遊ぶ。土を掘ってガーデニングをする人

表4 作業の普遍的性質

普遍性1	人は作業的存在である	Humans are occupational beings
普遍性2	人の作業は特異的である	Human occupation is idiosyncratic
普遍性3	人の作業の形態は環境と人との相互作用から生じる	The form of human occupation derives from person(s) in interaction with environment
普遍性4	人の作業の機能は人のニーズから生じる	The function of human occupation emanates from human needs
普遍性5	人の作業は意味の源である	Human occupation is source of meaning
普遍性6	人の作業には力がある	Human occupation has potency
普遍性7	人の作業の力は何から影響を受けるのか	The potency of human occupation is affected by...

もいる。建設現場でも土を掘っている。金塊を掘り当てようという人もいれば、化石を掘る人もいる。何のために掘っているか、機能は多様である。フィギュアスケートの演技は、選手によって違うし、同じ選手でもいつ行うかによって違う。

ではこれが、反証可能かどうか考えてみる。同じ場所で大勢のカップルが集まって同時に結婚式を挙げる人たちがいる。集団行動や軍隊の行進のように、みんなが同じことを同じように行うことがある。1974年に映画化された「ステップフォードの妻たち」では、男性好みの妻になるようロボット化されていた。このように、作業が人によって特異的でない例があるが、これは誰かの意図によって行われているか、フィクションである。したがって、本来人の作業は特異的なのである。

作業の普遍的性質 3 : 人の作業の形態は環境と人との相互作用から生じる

どのような環境で行われるかによって、作業の形態は変わる。カナダ作業遂行モデル (Canadian Association of Occupational Therapists, 1997) では、人は環境の中に存在し、人と環境の相互作用の中で作業が行われると捉える。バレエはバレリーナの才能により作業の形態が決まり、バイオリン演奏は演奏者の才能により作業の形態が決まる。相撲のように個人の体型や能力が必要な競技もある。水があれば泳げる、雪があればスキーができるというように物理的環境と人との相互作用で作業の形態が決まる。どんな車に乗って移動するかは社会的環境と関連するし、どんなダンスをするかは

文化的環境と関連する。どの人形で遊ぶかは時代の流れにより変わり、これは時間的環境の影響といえる。

では環境から独立して行われる作業があるかどうか、反証可能性を考えてみる。乳児が積み木に手を伸ばしてつかもうとする作業は、どの環境でも変わらない。雪のないジャマイカにボブスレー選手がいるのは、環境の影響を受けていないように見える。雪の中で露天風呂に入るのも環境と人との相互作用から生じているようには見えない。しかし、これらは、非常に基本的な単純な動作であるか、意図的なものである。したがって、あるレベルの複雑さをもった作業で、環境を無視して行うという意図がある場合以外は、環境と人との相互作用により作業の形態が決まる。ジャマイカのボブスレー選手たちは、実際にはカナダで練習した。

作業の普遍的性質 4：人の作業の機能は人のニーズから生じる

個人、集団、文化といったレベルで、あらゆる範囲の普遍的な人のニーズを満たすために、人は作業を行う。カナダ作業遂行モデルでは、自分の身の回りのこと（セルフケア）をするため、生活を楽しむ（レジャー）のため、社会や他者に貢献（生産）するためといった3つの機能を取り上げている。人間作業モデルでは、「人が仕事、遊び、セルフケアの中で行うことは、モチベーション要因の機能である」（Forsyth & Kielhofner, 2003, p. 48）と述べている。プラトンは、「人の行動は、望み、感情、知識の、3つの源からあふれくる」と述べた。孔子は、「勝ちたいという希望、成功したいという願望、最大の可能性に到達したいという思い・・・これらは個人の優秀さへの扉を開く鍵である」と述べた。マズローの欲求のヒエラルキーについて、2011年にDienerらが155か国を対象に研究を行い、マズローの理論は概ね正しいと報告した。マズローの指摘した欲求は普遍的なものであり、人生の満足は基礎的な生活の欲求の充足と関連する。しかしヒエラルキーについては疑問がある。社会の他の人々の欲求も満たされているときには、より一層自分の人生に対する評価が高くなると述べた。

人の基本ニーズは、作業との結び付き、食料と家、安全とリラックス、所属（つながり）、自身や成功、個人としての自己実現、文化としての自己実現、他者のニーズへの貢献があると考えられる。

ではこれが、反証可能かどうか考えてみる。路地にたむろしたり、ただじゃがみこんでいるだけだったり、自閉症の子どもが同じ行動を繰り返していることは、

役に立たない（機能しない）。しかしそれは、作業をすることを妨げられていると考えられる。

作業の普遍的性質 5：人の作業は意味の源である

人は作業を通して意味を得る。意味は人によっても、その人が所属する社会や文化や時代といった文脈によっても違い、多様である。プラトンは、人は意味を探し求める存在であると述べた。カール・ユングは、意味のあることの中で最小のことは、意味のないことの中で最大のことにより価値があると述べた。次のような逸話もある。「鉄のハンマーで岩をたたいている3人の男がいた。何をしているか問うと、一人目は「大きい岩を壊して小さくしている」と答え、二人目は「家族にご飯を食べさせている」と答え、三人目は「大聖堂を作っている」と答えた。オーストリアの精神科医であるヴィクトール・フランクル（Viktor E Frankl）は、「人生の意味は、人によって、日によって、時間によって異なる。重要なのは一般的な人生の意味ではなく、ある瞬間における個人の人生の特定の意味である」と述べた。作業の意味は、同じグループにいる各個人によっても違い、お茶を飲む場合であっても、日本の茶道と英国のティータイムでは意味が異なる。ヴィクトール・フランクルは、人生の意味は、愛と苦悩と仕事から見出されると述べた。愛とは何かを経験したり誰かに会うことであり、苦悩とは避け難い苦悩に向かって私たちがとる態度であり、仕事とは何かを生み出したり実行することである、と述べた。さらに、「仕事がないければ、人はたやすく目的を見失った状態になる」とも述べた。Steger (2009) は、意味のある仕事には、3つの中心的要素があり、それは、納得できる仕事、目的がある仕事、何かよりよいことに益する仕事である、と述べた。さらに、増え行くエビデンスによれば、意味のある仕事をする労働者は幸せであり、よりコミットし、いくらかじれたいこともあるが、よりよい労働者である、とも述べた。日系三世の理論物理学者 Michio Kaku は、「人生に意味を与えるものは、仕事と愛の他に二つある。一つは、生まれ持った才能を発揮すること。二つ目は、この世を生まれた時より良い場所にして去ることである、仕事は、短期長期の目標を提供し、これらを達成することは深い満足と価値の感覚をもたらす」と述べた。また、作業はアイデンティティのつぼである。Hall と Buck (1915) は、「The work of our hands: A study of occupations for invalids（手仕事：病人のための作業の研究）」という本の中で、行うという経験を通しての意味の生成について、「自らの手で勤

勉に仕事をすると発見がある。新しい道に自身の道を見出す。仕事の尊厳と満足を学び、よりシンプルで健全な生活についての考えを得る。これはそれ自体もいいことだが、さらによいことには、開かれた心が新しい視点と希望と信念を与える」と書いている。スウェーデンの作業療法士である Hans Jonsson (2004) は、52歳の男性の事例を報告した。彼は成功したビジネスマンだったが、交通事故に会い4週間こん睡状態の後、脳外傷後遺症で部分麻痺が残った。彼はリハビリテーション棟に移され、自分の手で何かをすることを始めた。最初はとても単純な作品を作ったが、彼は何かができることを知った。そこで彼は、作業療法士に提案しうる最も難しいことをさせてくれるよう頼んだ。革が渡されそれで財布を作った。そして彼は、「3週間それに取り組みました。その間これを作れるなら何でもできると思いました。今ではこの財布は私の最も大切なもののひとつです」と述べた。

ではこれが、反証可能かどうか考えてみる。囚人が行う労働は、個人的な意味はないかもしれない。電話交換手の仕事は、現代ではもうなくなってしまった。意味のない作業もあるが、それは何かにより制限されていたり、時代の変化により意味が失われた場合である。

作業の普遍的性質 6：人の作業には力がある

人の作業は、ポジティブあるいはネガティブな効果を、人や環境に与える。人は人と共に、遊び、学び、育つ。つまり作業は人に変化をもたらす。作業療法は作業の治療的力を基本として成り立っている。作業は人に対して影響力をもっているが、その影響はポジティブな場合もあれば、ネガティブな場合もある。失業がうつを悪化させ、アイデンティティを喪失させる。不良姿勢での労働が腰痛などの疾病の原因となるのは、作業のネガティブな影響の例である。職業により認知症の発現の仕方が異なることを推測させる報告もある。早期の認知症患者の脳萎縮の場所が、企業の管理職の場合は右脳に強く生じ、美術担当職の場合は左脳に強く生じていた。作業は、健康と安寧を促進するが、その一方で1992年から2006年の間に、労働災害による死亡者数は減少しているものの存在している。怪我や死亡リスクのある作業もあるし、児童売春や薬物依存など健康を害する作業もある。

地球に対しても作業の影響はある。土地の造成などの作業は、大なり小なり地球を変えている。会食などの作業は社会的環境を生み出す。建物を破壊したり、

建築したりする作業により、物理的環境が変わる。作業には時間を構造化するという力もある。一日の生活リズムが作られたり、一週間の生活が構造化されたりする。作業を行うことで、人がよい状態でいられたり、アイデンティティの表現ができたり、人とつながったり、過去、現在、未来とつながったりできる。それは、作業に多様性があり、作業が選択できたり、達成することができ、作業を行う人が自分で作業をコントロールできる場合である (Rudman, Cook & Polatajko, 1997)。仕事がなければ人の状態も悪くなるが、作業がなされなければ環境も荒れてしまう。人の作業は、ポジティブあるいはネガティブな効果を、人や環境に与えるといえる。

作業の普遍的性質 7：人の作業の力は何から影響を受けるのか

作業科学にとっても作業療法にとっても作業の理解が不可欠であり、作業の普遍性について述べてきた。その中で、作業には普遍的特異性がある（作業は人によっても、場所によっても、時間によってもさまざま異なっているということが普遍である）かどうかを批判的に検証してきた。作業には人や環境に影響を与える力があることは明らかになったが、その作業の力がどのように生じるかというメカニズムについては、まだ十分に研究されていない。科学は、観察や実験から得られた体系的な事実と真実を扱い、一般的な法則を明らかにする知識や研究である。家を石で作るように、科学は事実を組み立てるが、石の山が家でないのと同様、単なる事実の集積は科学ではない。普遍的な特徴の可能性について批判的に吟味する中で、作業の理論の構築のためには、人の作業の事実や真実（誰が、何を、いつ、どこで、なぜ行うか）といった作業メカニズム（どのようになっているか）を理解する必要性がある。作業科学は、人の作業のメカニズムを明らかにする研究のパラダイムを採用する必要がある。つまり、人の作業の理論を構築することが、現在私たちに課せられている挑戦なのである。

最後に、Polatajko (2007) の作業の詩を紹介する。これは、「続・作業療法の視点」(p.62) に掲載されている。

作業って不思議なものだ
Occupation is a curious thing

作業は生活に浸透し、日常をつくる It pervades our lives and marks our days.

作業は私たちが定義し、また、私たちが作業を定義する It defines us and is defined by us.

作業は世界を作り、また、世界が作業をつくる It both shapes the world and is shaped by the world.

作業は使う道具とその形跡でわかる It can be known by the tools it uses and the wake it leaves in its path.

作業は人が行うまで、実体がなく見えない It is intangible and invisible until a person engages in it.

作業はアートの遂行である It is a performing art.

作業は人が遂行した時のみ目に見える、また、作業は人がその意味を語った時のみに理解することができる It can only be seen when a person performs it and only understood when a person tells you its meaning.

文献

Canadian Association of Occupational Therapists (1997).

Enabling Occupation: An Occupational Therapy Perspective. CAOT Publications ACE, Ottawa. カナダ作業療法士協会・著、吉川ひろみ・監訳 (2001). *続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正*. 大学教育出版.

Kielhofner, G. (1995). *A model of human occupation (second edition)*. Baltimore, MD:Williams & Wilkins. ギャーリー・キールホフナー・著 山田孝・監訳 (1999). *人間作業モデル改訂第2版 理論と応用*. 協同医書出版社.

Merriam Webster Dictionary

<<http://www.merriam-webster.com/dictionary/occupation>>

Polatajko, H.J. et al (2007). Specifying the domain of

concern: Occupation as core. In E. A. Townsend & Polatajko HJ: *Enabling Occupation II: Advancing an Occupational Therapy Vision for Health, Well-being and Justice Through Occupation*. CAOT Publications ACE, Ottawa, 2007. PP. 9-36. エリザベス・タウンゼント、ヘレン・ポラタイコ編著、吉川ひろみ、吉野英子監訳 (2011), *続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正*. 大学教育出版. pp. 34-60.

Rudman, D. L., Cook, J. V., & Polatajko, H. (1997).

Understanding the potential of occupation: a qualitative exploration of seniors' perspectives on activity. *Amer J Occup Ther*, 51(8), 640-50.

Science News (2010). For Sufferers of an Early-Onset Dementia, Career Choice May Determine Location of Disease in Brain.

<<http://www.sciencedaily.com/releases/2010/09/100922124348.htm>>

Steger, M. (2009). Meaningful Work: What makes work meaningful?

<<http://www.psychologytoday.com/blog/the-meaning-in-life/200906/meaningful-work>>

Townsend, E. A. & Polatajko, H. J. (2007, 2013). *Enabling Occupation II: Advancing an Occupational Therapy Vision for Health, Well-being and Justice Through Occupation*. CAOT Publications ACE, Ottawa. エリザベス・タウンゼント、ヘレン・ポラタイコ編著、吉川ひろみ、吉野英子監訳 (2011). *続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正*. 大学教育出版.

Yerxa, E. J. (1990). An Introduction to Occupational Science, A Foundation for Occupational Therapy in the 21st Century. *Occupational Therapy in Health Care*, 6 (4), 1-17.

Yerxa, E. J. (2009). Infinite distance between the I and the it. *Amer J Occup Ther*, 63 (4), 490-497.

作業科学研究, 7, 36-42, 2013.